「日本一の兵」と称された、正義と信念の武将
真田幸村（仏胴具足着用像）全高約36センチ

『大坂夏の陣』静謐な座像に幸村の心象を投影

本像は、大坂夏の陣にて力を尽くし戦い切ったのち、安居天神付近での幸村の静謐なひとときを立体化した。幸村率いる真田軍は、圧倒的多数の徳川軍に寡兵で立ち向かい、家康本陣にまで迫る驚くべき奮闘をみせた。それでも圧倒する兵力に及ばす果てることは、あらかじめ予期していた事であった。苛烈な戦いに挑んだ幸村に思いを馳せると、歴史に名を残すに充分な功績を立てた誇らしさと充足感、また西軍の敗退と共に消えゆく、自らの運命への寂寥感が交錯する。

【真田三代を結集した武将】

幸村の存在が無ければ、後世までこれだけ真田氏が広く武家の理想と語り継がれることは無かっただろう。

信濃国小県郡の小大名だった祖父・幸隆は武田信玄に仕え、武田二十四将として名を馳せた。また父・昌幸もまた信玄の薫陶を受け、調略・謀略を得意として、徳川軍を二度にわたって打ち破っている。天下人、豊臣秀吉にも臆せず渡りあるく父を見ていた幸村にとって、自らもまた真田の一族として相応しい活躍の場を求めたことだろう。関ヶ原の戦いでは、徳川秀忠を足止め、遅参させたことで高野山九度山に十四年もの間蟄居させられた。祖父・父の才を確かに引き継いでいながら、充分な戦場が与えられなかった幸村には、深く鬱屈した思いがあったに違いない。幸村には使う術のない戦略が溢れていた。その最後に訪れた機会が【大坂の陣】であったはずだ。

仏胴具足（ほとけどうぐそく）

仏像の滑らかで継ぎ目のない胸に似ていることから由来する。鉄砲の弾や槍を受け流しやすく、実戦向きとして戦国期によく用いられた。真田幸村の装束は真田庵に残される現存資料の他、真田氏が後に仕えた武田一族の高位の武家に残される鎧などを複合的に研究して参考としている。また、一部幸村のイメージを重要視してオリジナルの創作・装飾も加えている。

作家／海野（うんの）宗伯（そうはく）

1962年生まれ。90年頃より安土桃山の造形美を求めて甲冑や武将像の制作を開始。日本を代表する甲冑師・三浦公法氏に依頼し、共に世界で初めてとなる本物と同素材・同製法による幸村1／4創作鎧を完成。のち精巧な鎧装束の武将彫刻作品を制作する。

制作への思い

真田は夏の陣において、家康本陣の旗を倒す程に奮戦した。家康本陣の旗が倒れることは、三方ケ原以来ないことで、その戦ぶりは敵方でさえ「真田、日本一の兵」と称賛した程。まさに武功によって名を残したのである。しかし、幸村について研究を行うにつれ、伝記や小説に描かれる猛々しいイメージとは違った繊細な人間像や、戦術と用兵に長けた冷静な武将の姿が浮かび上がって来た。あえて戦う像にしないことで、より真実の幸村に迫る像にした。

日本の甲冑技術は、世界で高い評価を得ていながら継承に問題を抱えている。作品制作にあたり、当世具足の第一人者で甲冑師の三浦氏に協力を依頼し、1／4サイズで本物の鎧と全く同素材・製法を用いて鎧を制作し造形の基本とした。現存する確実な資料を頼りに、鎧本来の構造を正確に再現した像となる。鉄・漆・革など複合素材を用いる日本の鎧ならではの質感も多くの技術と時間を費やし精巧に再現した。この立体彫像はそれら日本の技を、美術作品として後世へ残すものと考えている。

【創作甲冑】真田幸村

甲冑師　三浦公法　作
（社）日本甲冑武具保存協会
（元）専務理事／（現）顧問
1/4創作鎧（幸村像の基本型）

生命ほとばしる、瞳の輝きを再現

▲幸村像の目には生命感を宿す輝きを再現した。
瞳の描き入れ、また兜の装着、紐結いなどすべて手仕事。時間を掛けて丁寧に制作している。

彩色

真田の赤備えとして有名な甲冑を、独自の赤で彩色した。同じ赤の中にも幅広い色調と質感の変化をつけており、まとめ上げる高度な彩色仕上げは、作家の技術が如何なく発揮されている。その一作にかかる制作時間はおよそ40時間におよぶ。

造形

立体造形は絵画など平面物に比べ、はるかに制作が難しい。造形の各部を歪みなく正確に複製し、磨き、形を整え、組み、彩色する。その工程は膨大で、時間はもちろん、職人の技術も必要となる。鎧装束のしっかりとした考証的見地を備えた正確な彫刻作品という点において、本作は他に類がない。またこれだけの鎧を細部にわたり精巧につくり上げる技術も含め、美術品として、また工芸品として価値ある作品と言える。

収納・保管に最適 専用化粧箱入り

工房にて少数手づくりされる幸村像。化粧箱には限定制作のシリアル番号入り。けっして大量生産できない、限定制作であることを示している。

限定制作50体 シリアルナンバー入り

© KENSIN